

- ❑ 英語の名詞はもともと格変化をしていたが、それが衰退していくにつれ前置詞が発達してきた。
- ❑ 動詞の一部をなしていた接頭辞が後ろに移動し副詞の働きをするようになっていった。
- ❑ 名詞の前に前置詞が、動詞の後に副詞が置かれることにより、比喩的な意味に拡張されて用いられるようになった。これが句動詞の始まりである。
- ❑ 英語特有の「空間」と「広がり」を中心にとらえる考え方が句動詞にも持ち込まれた。
- ❑ 英語では「空間における動きや存在」に注意を払い、「目的語にどのような変化が起こったのか」を特定する必要がある。「木を切った」という場合、I cut the tree. だけでは足りない。
- ❑ fill in と fill out とは同じ意味を表していても底流するイメージはかなり異なっており、この違い自体が英語の「空間」と「広がり」の扱い方を表している。
- ❑ 句動詞に用いられる前置詞や副詞は「空間」や「時間」や、それらの中に存在する物どうしの「連合」を表すものである。
- ❑ 前置詞と副詞には共通点があるため、英語のネイティブスピーカーにとっては同じように感じられる。
- ❑ 前置詞と副詞を分けて考えず、1つのグループ(パーティクル)に考えたほうが句動詞の問題を単純化できる。
- ❑ 句動詞はライフスタイルの変化という時代の要請に応えるためにつくり出されることも多い。
- ❑ 句動詞には「動詞+副詞+前置詞」という3つの要素からつくられるものもあるが、この場合、副詞と前置詞で「前置詞句」を形成し、1つの前置詞として機能する。

第3章

句動詞とは何だろう？

What is a Phrasal Verb?

1 句動詞は難しい？

英文法の中でも、「句動詞」はよくわからなくて苦手という学習者が多いのは確かです。この理由はいくつかあります。

1. 句動詞は、いくつかのグループとパターンに分かれ、それぞれが独自の構造と用法をもっている。これがわからないとひとつひとつの句動詞の使い方を知るのが難しい。
2. その句動詞を構成している部分から新しいあるいは未知の句動詞の意味を予測できることがよくあるが、予測のつかないことも多い。
3. 1つの句動詞が幅広い意味をもっていることが多い。
4. 多くの句動詞は一定の語と結びつく、つまりコロケーション (collocation) を作る傾向が強い。したがって、句動詞の意味を知っているからといって、どんな名詞でもその目的語にできるというわけではない。
5. 句動詞の数は多い上に常に増えており、また変化している。
6. 1～5の点に加えて、句動詞とは何かということ自体が正確にはよくわからないという事実がある。文法書や辞書や教科書によって定義のされ方もさまざまである。

2 句動詞のミステリー

本書では、上にあげた問題点を直接扱うことにします。そして句動詞にまつわる「ミステリー」あるいは難解さをいくらかでも取り除きたいと思います。

その準備段階として、まず句動詞というものがいくつぐらいあるかを話さなければいけません。そしてこのことは「句動詞とは正確には何か」という問題にも自然とつながります。

最初に、みなさんが今まで「イディオム」(熟語)だと思っていた「動詞+前置詞/副詞」のパターンについてさまざまな可能性を見ていくことにします。

本章以降では、話を簡単にするために、前章で紹介した「パーティクル (particle)」という語を用いて前置詞と副詞をまとめて表すことにします (p.037 参照)。そして、特別の場合に限って、前置詞あるいは副詞という語を用います。

まず、句動詞をその性質の上から次の5つのグループに分類するのがわかりやすいと思います。

- グループ ①: 「動詞+パーティクル」の基本的な組み合わせ
- グループ ②: 動詞の意味を強める句動詞
- グループ ③: 特定のパーティクルを伴う句動詞
- グループ ④: 意味の予測が難しい熟語的な句動詞
- グループ ⑤: 特定の名詞を伴う句動詞

以下、それぞれのグループについて説明を加えていきます。



3 グループ①: 「動詞+パーティクル」の基本的な組み合わせ

- ▶ **come into the room** (部屋に入る) や **walk across the room** (部屋を横切る) のように意味が明確な場合

このような「動詞+パーティクル」の組み合わせは意味がはっきりしているので、句動詞として扱うまでもないと言われることがよくあります。確かにそのとおりとも言えますが、英語を外国語として学ぶ場合、以下のような理由で、あえてそれらも句動詞として扱うほうが望ましいと考えます。

1. 初級者にとっては必ずしも意味が明らかとは言えない。
2. この例のように意味が明らかなものでも、しばしば比喩的に用いられ、もとの意味からは予測のつきにくい意味に姿を変えることが少なくない。たとえば、**come into the room** (部屋に入る) の中の **come into** という単純明快な意味が、**come into a discussion** (議論に加わる) という比喩的な意味に変わる場合など。
3. このような基本的な組み合わせ (**come into**) を知ることによって、学習者は具体的な意味 (**come into the room**) から比喩的に拡張された意味 (**come into a discussion**) の知識や用法を推測する力が養える。

数が膨大なため、辞書はこうした句動詞をすべて載せることはできません。パーティクル **across** を用いた **walk across** と同様の句動詞として次のようなものがありますが、いちいち載せていたらきりがありません：

come/go/run/move/swim/skate/crawl
saunter/climb/jump/drive, etc. } + **across**
(~を) 横切って 来る / 行く / 走る / 動く / 泳ぐ / 滑る / 這う
散歩する / 登る / 跳ぶ / 運転する、など

しかし、一般学習者向けの辞書や参考書ならば、このような意味が具体的でわかりきった組み合わせでも、少なくともそのいくつかは載せておくべきでしょう。

逆に、「動詞+パーティクル」を「句動詞」として扱うかどうかは「**パーティクルの性質**」にも影響されます。

たとえば、英語学習者にとっては *She walked on the grass.* (彼女は芝生の上を歩いた) のほうが *She walked across the grass.* (芝生を横切った) よりもやさしく見えます。across よりも on のほうがなじみが深いからです。同様に against, apart, through, without のようなパーティクルは、at, in, on, out などよりも意味が複雑に思われます。したがって、これらを用いた *lean against* (a wall) ((壁に) よりかかる)、*sit apart* (離れて座る) のような「動詞+パーティクル」は句動詞として覚えたほうがよいと思われるのです。

句動詞が文字通りの意味をもっているか比喩的な意味をもっているかを知る方法として、次のような簡単なやり方があります：

- He **came into** the office. 「彼は事務所に入ってきた」

この文は次のように変えることができます：

- **Into** the office he **came**. 「その事務所に彼は入ってきた」

しかし次の文を同じように変えることはできません：

- He **came into** the discussion. 「彼はその議論に加わった」
- × *Into the discussion* he came.

こうすることによって、office の例文では句動詞は文字通りの意味であり、その次の discussion の例文では比喩的に拡張された意味であることがわかります。

4 グループ ②：動詞の意味を強める句動詞

- ▶ 動詞の部分だけでも、それにパーティクルを加えて句動詞にした場合と実質的には意味があまり変わらないと思われるもの

ただし、あまり変わらないといっても、パーティクルはその動詞に何らかの余分な情報やニュアンスを加えることでその役割を果たしているのです。たとえば、grind up (細かくすりつぶす)、jump up (急に立ち上がる)、separate out (選別する)、cancel out (相殺する) などです。このことは前章でもふれました。

5 グループ ③：特定のパーティクルを伴う句動詞

- ▶ 動詞に伴うパーティクルがほぼ固定化している句動詞：
refer to (～に言及する)、exclude from (～を...から除外する) など

こうした動詞の多くはアングロサクソン語 (古代の英語) が起源ではなくラテン語あるいはフランス語に由来しています。アングロサクソン語よりも綴りが長い場合が多く、気取った意味をもっています。また、意味もほとんどが1つか2つに決まっています。これらはたとえて言えば、日本語の和語と漢語の関係に似ている

でしょうか：

- **アングロサクソン系**：see as, put in, come to, set to (いずれも多くの意味がある)、など
- **ラテン系**：masquerade as (～のふりをする)、include in (～を...に含める)、allude to (～をほのめかす)、predispose to (～を(病気など)にかかりやすくする)、など

6 グループ ④：意味の予測が難しい熟語的な句動詞

- ▶ 句動詞の意味が、それを構成する個々の動詞およびパーティクルの意味を足し合わせても推測が困難なもの：
go up (= explode)、burn up (= be angry) など

こうしたものはそれぞれ個別に覚えなくてはならない場合もあります。しかし、動詞とパーティクルを適切に理解することが、このグループの句動詞の意味を理解するうえで大変役に立つことを本書で示すつもりです。このグループの句動詞は「イディオム(熟語)」と呼ばれることも多いものです。

7 グループ ⑤：特定の名詞を伴う句動詞

- ▶ 句動詞とその後に続く名詞(目的語)の結びつきが、ある程度決まっている場合

その結びつきの強さはいろいろあるようです。

come into sight (見えてくる) における come into は句動詞ですが、同時に come into sight という、イディオム(完全に固定した表現)とまでは言えなくとも、ある程度固定した表現(コロケーション)

ョン：連語)の一部でもあるのです。sight とほぼ同じ意味をもつ view もこの句動詞とともに用いられ、同様の意味になります。

come into はまた、come into use (使われ始める)、come into force ((法律などが) 効力を発する) などのコロケーションをつくります。しかし、この come into は come into sight の come into とは違った意味をもつ別の句動詞と言えるでしょう。

ですから、この2つの come into は辞書ではそれぞれ独立した1つの項目として取り上げられている場合も多く、個別に覚える必要があるでしょう。

8 英語を使える形で覚えるには

以上、まだ大ざっぱに句動詞を形の上から5つに分けてみただけですが、徐々にみなさんの知らなかった句動詞の姿が見えてきたのではないのでしょうか。

次章以降、句動詞についてさらにくわしくお話していくのですが、その前に句動詞を含めた英語全体の勉強法に関わるきわめて重要なことについてふれたいと思います。

それは、**用例の形に細心の注意をはらうことが勉強の効率を大きく左右する**ということです。この「用例の形」を“citation form”と言います。skate around は skate around something、また put aside は put something aside というふうに、ノートやメモに記すようにしてください。こうすることにより、句動詞のみならず**英語全体の仕組みを正しく理解することができます**。

私の経験では、次のような書き方で英語を覚えようとしている学習者がとても多いのです：

skate around 避ける
put aside 脇へ置く

しかも自分は英語を勉強しているつもりになっているのです。このような人は決まって次のように言うでしょう。「私は単語の意味は知っているのですが、文の中でそれを使えないのです」と。まったく当然です!!

用例の形に注意することはリスニングにも大きな効果を発揮します。学習者が skate around something や put something aside と覚えれば、時間がたっても、こうした形が自然と耳や頭の中にこだまするのに気づくことでしょう。これは人の名前を覚える(そして思い出す)プロセスと少し似ています。

Steve Jobs という名前に最初に出会ったときにどういうことが起きるかといえば、その名前はまずひとかたまりで耳に聞こえ、それがそのまま脳に保存されます。後になって、その名前を思い出したいときには、同じようにひとかたまりとして記憶の中を検索して、それを取り出します。

このことは簡単に確かめることができます。歴史の授業で習った歴史上の人物を思い出したり、何年も会っていない学生時代の友人を思い出そうとしてみてください。姓と名がひとかたまりになって、ほとんど同時に頭の中にひょっこり浮かんでくるのがよくあるでしょう。

しかし、私自身これまでに、学習者に用例の形に注意するように勧めてきましたが、残念ながらうまくいったとは言えません。これはおそらく避けられないことかもしれないという気がします。というのも、日本の教育制度を経験した人はほとんど誰もが、外国語を学ぶということは主として単語の意味を学ぶことだと考えているからです。そのような人たちは、単語の学習とはそれを文脈の中でどのように使うか、別の言い方をすれば、単語が文中でどのように当てはまるのかを学ぶことだとは考えないのです。その意味で、**後で正しく使えるきちんとした形で覚えておくことの重要性**を理解していただきたいと思います。

この章のまとめ

- 句動詞がわかりにくいとされるのはいくつかの理由がある。
- そのひとつとして、句動詞がいくつかのグループに分かれることがあるが、そのグループは5つある。
グループ①：「動詞＋パーティクル」の基本的な組み合わせ
グループ②：動詞の意味を強める句動詞
グループ③：特定のパーティクルを伴う句動詞
グループ④：意味の予測が難しい熟語的な句動詞
グループ⑤：特定の名詞を伴う句動詞
- 「動詞＋パーティクル」を「句動詞」として扱うかどうかは「パーティクルの性質」にも影響される。
- 句動詞からパーティクルを取り除いても実質的には意味があまり変わらないと思われるものがあるが、パーティクルはその動詞に何らかの余分な情報やニュアンスを加えることでその役割を果たしている。
- ラテン語・フランス語に由来する語はアングロサクソン語よりも綴りが長い場合が多く、気取った意味をもつ。意味もほとんどが1つか2つに決まっている。
- 意味の予測が難しい熟語的な句動詞もある。
- コロケーションの問題もあり、意味を個別に覚える必要がある句動詞もある。
- 英語を学習するさいに用例の形に細心の注意をはらうことが勉強の効率を大きく左右する。

第4章

句動詞の文法的な パターン

Seven Patterns of Phrasal Verbs